

Can-do中心の新しい日本語教科書『まるごと 日本のことばと文化 活動編』

来嶋洋美・今井寿枝*・木谷直之・柴原智代・根津誠・八田直美

(独)国際交流基金 日本語国際センター、*関西国際センター

『まるごと 日本のことばと文化』

- 「JF日本語教育スタンダード」準拠教科書
- JF日本語講座コースブック(各国JFで試用中)
- 学習者:海外の成人学習者
- レベル:入門(A1)、初級1・2(A2)
- 開発理念:相互理解のための日本語

●課題遂行能力

日本語を使って何ができるか
→JFS 言語能力、言語活動

●異文化理解能力

さまざまな文化に触れることで
いかに視野を広げ他者の文化を理解し尊重するか

JFスタンダードと
2つの『まるごと』

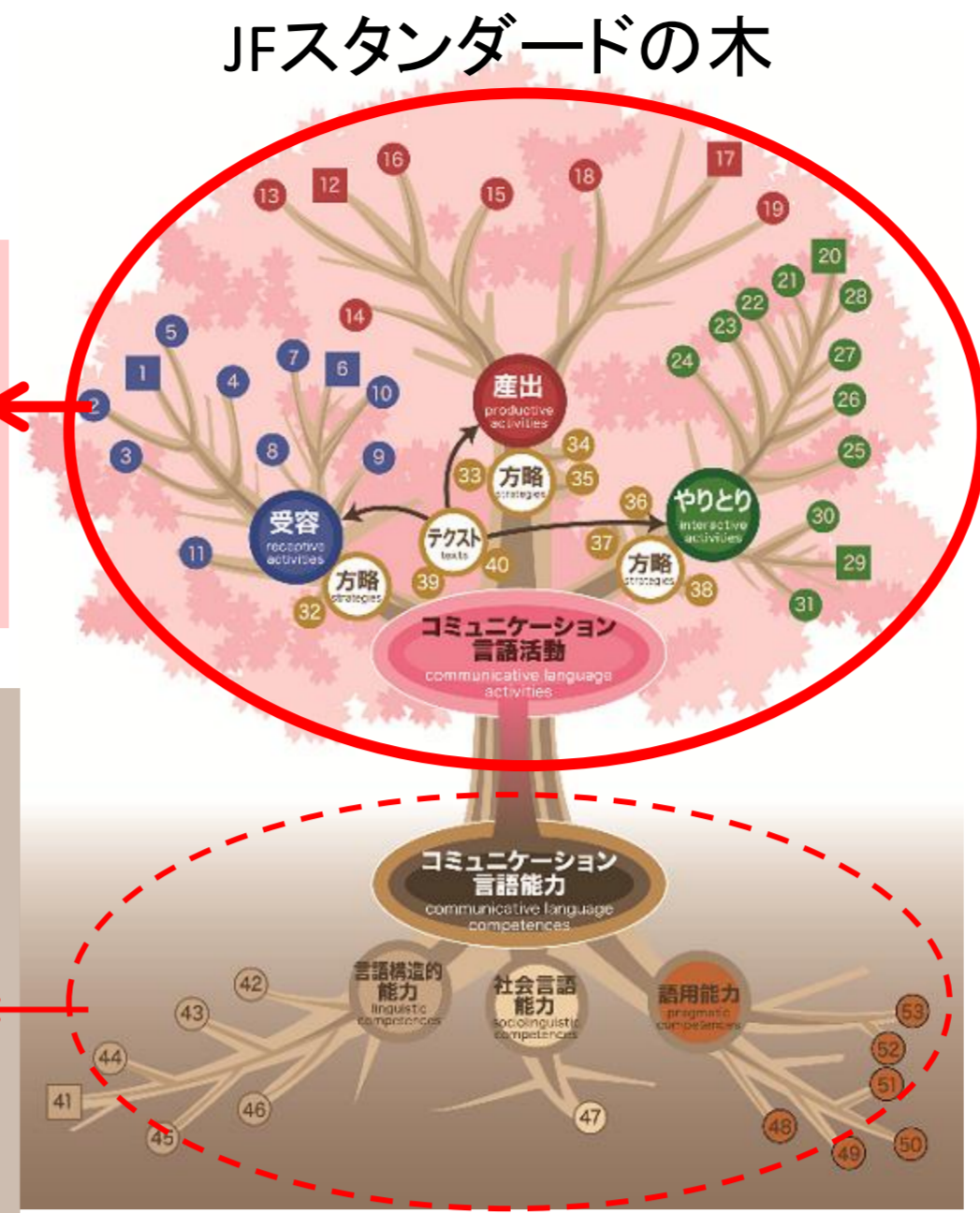
言語能力を使って、様々な
言語活動を行う

「活動編」

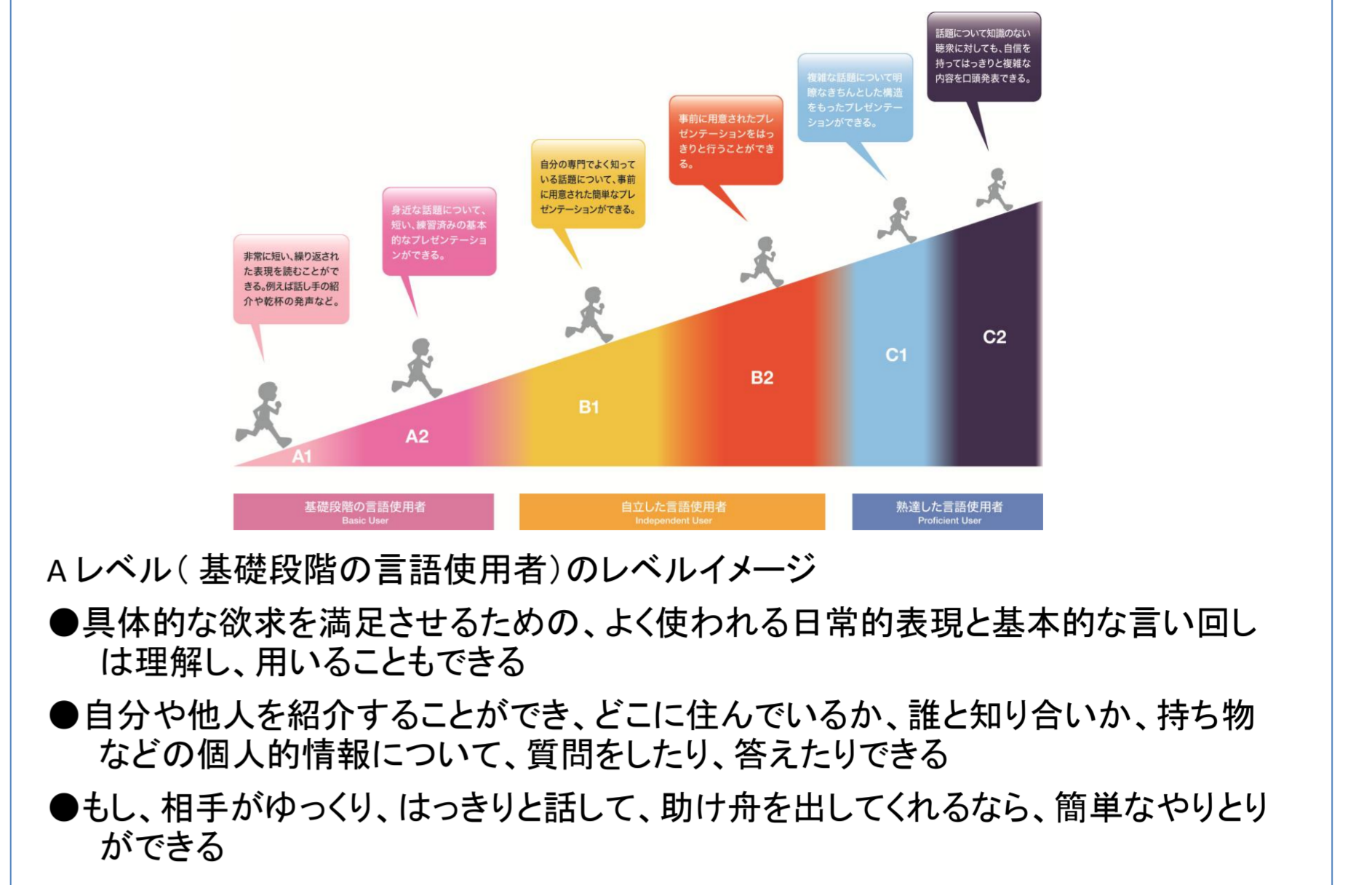
言語によるコミュニケーションのために基礎となる
言語能力を養う

「理解編」

主に言語構造的な能力と
社会言語能力



JFスタンダード/CEFR 熟達度



『まるごと』活動編 の特徴

1 課題遂行(Can-do)の学習目標

- 言語活動の記述文(Can-do)から成る。
- 各Can-doはJFスタンダード/CEFRを参照して作られている。

●言語活動の会話内容や場面は、トピックの枠の中で書かれている。(自分と家族、住まいと住環境、自由時間と娯楽などJFスタンダードの15のトピック)

2 発展するCan-do

- 同じトピックでも上のレベルでは、場面・語彙・表現・文型の違うものが出現し、学習が発展していく。

入門(A1)第5課

Can-do 10 ほかにの人に飲み物を勧める

- A: コーヒー、のみますか。
B: はい、おねがいます。
A: はい、どうぞ。 / いいえ、けっこうです。
B: すみません。

初級1(A2)第12課

Can-do 30 味について簡単にコメントする
Can-do 31 友達に食べ物を勧める / 勧めに応える

- A: やぎさん、よかったら、サラダ、どうぞ。
B: はい、いただきます。このサラダ、ちょっとからくて、おいしいですね。
A: そうですか。もうすこしどうですか。
B: ありがとうございます。でも、もうおなかがいっぱいです。 / もうけっこうです。
A: そうですか。

3 海外での日本語使用を意識した会話

場面会話(L6,L13,L15など)

- 現地にいる日本人に情報提供する、助ける。
- 学習者が日本に行って短期滞在でも経験する。
→食べ物を注文する、移動の方法など

交流会話(L4,L6,L11,L18など)

- 機会があれば、話すようなこと(自分のこと)
- 友達になる。
→食べ物の好き嫌い、昼食を食べる場所、趣味など

4 聴解先行・音声重視

- Can-doは音声言語を通したやりとりが中心。
- 海外学習者に不足しがちな聞く活動をできるだけ多く取り入れる。
- 「聞く→わかる→ためす・おぼえる」学習の流れ
- 自然な日本語を聞くこと
呼びかけ、縮約形、言いよどみ、倒置、省略、いろいろな声(年代、性別、個性)、表現のバリエーション

5 相互理解のための文化学習

「しゃかいぶんか(社会文化)」のページ

- 目で見てわかることから始める。
- 社会・生活文化情報が写真で提示され、それについて考え、母語で話し合うことで理解を深める。

6 豊富な写真・イラスト

- トピックや場面の提示
- コミュニケーションの動機づけ

7 文字学習

- 文字を通して音を学ぶのではなく、音を確認する手段として文字の読み方を学ぶ。(生活漢字は意味を学ぶ。)
- 教科書の表記
入門: かな+ローマ字 初級1: かな+漢字(ルビつき)
- 文字学習の負担感を取り除いて、会話中心に学びたい学習者が参加できるコースを作ることができる。

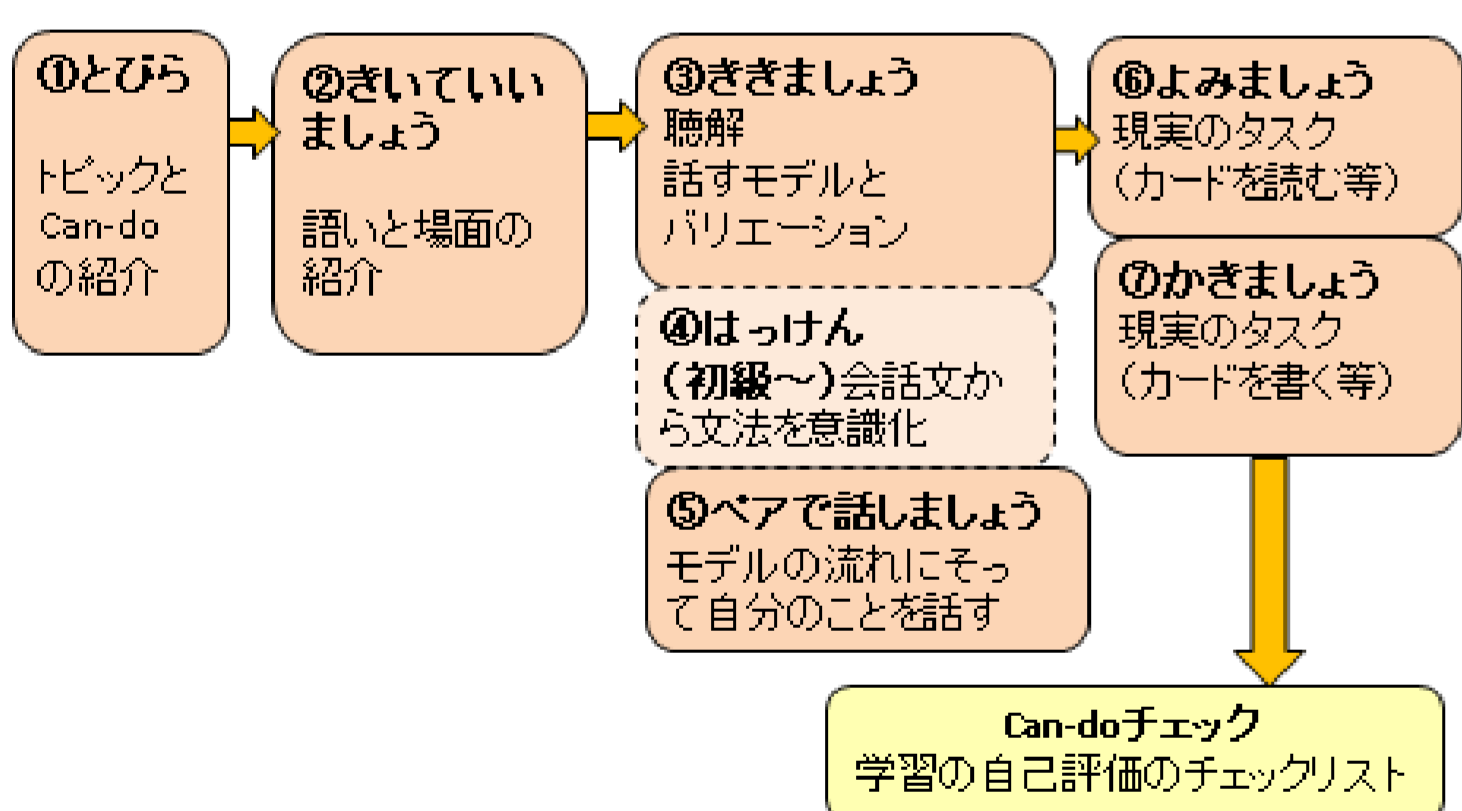
8 ポートフォリオ

- 学習の自己管理(自己評価チェックリスト、作品、テストなど)
- 日本語・日本文化の体験記録→海外でできる日本文化体験の方法も提案



教科書本文は
都合により削除しました。

『まるごと』活動編 課の構成



モニター調査でのコメント

<学習者から>

- テーマを中心に展開していて、日本語のすべてを学ばなくても、簡単な考えだけを伝えたい人にとって入りやすい。
- 日本語ができるようになりたいが、ひらがななどですれば時間とエネルギーを使い果たしてしまう恐れがあるので、自分はローマ字で勉強したいことに気づいた。
- 授業でどれだけたくさんのお話をできたかということに驚いて感心した。
- 語彙帳のおかげで初日から恥や恐れなく話そうとすることができた。日本語は難しいという偏見が消えた。
- 教科書ことばでも書きことばでもない本当の話しことばを勉強できるのがよい。
- 自己評価が難しい。

<教師から>

- 文型の定着は難しいが、教科書を見ながらよいという考え方は、学習初期から機械的なドリルではなく、自分のことを話せるのでよい。
- 授業のはじめは分析的な学習者から質問が続出したが、授業の後半はこのスタイル(場面と課題を理解して表現を使ってみる)慣れてきて、効率的に教えられた。
- 日本語学習のあとに、社会文化を母語で話すのは乗り気じゃない。
- 活動編ではトピック、場面、会話などがわかりやすくセッティングしてあるので、学習者も教材に引き込まれ、教師はそこから無理のない形で、コミュニケーション活動への誘導することができた。(2011年2-3月実施)

【参考文献・ウェブサイト】

- 国際交流基金(2010)「JF日本語教育スタンダード2010」
- 来嶋洋美・柴原智代・八田直美(2012)「JF日本語教育スタンダード準拠コースブックの開発」『国際交流基金日本語教育紀要』第8号, pp.103-117
- JF日本語教育スタンダード
<http://jfstandard.jp/summary/ja/render.do>

今後 2012年9月末「初級2(A2)」(試用版)刊行予定